

佐藤成広作 「礼拝」

- 音楽 (バッハの「モテット」)
- アナウンサー バッハ作曲、「モテット」イエスは我が喜び”ヘルムート・リリング指揮、シュトゥットガルト・バッハ管弦楽団と合唱団でした。(FO)
- 西村和宏 やっぱりバッハはいいなあ。何とも言えないこの感じ…。(旋律をハミング)
- アナウンサー バッハは、自分の信仰を、音楽で表したのです。ですから、バッハの音楽、特に宗教音楽は、とても深みがあります。私たち日本人には理解し難いところがあるのも、キリスト教の信仰を知らないからだとも言えるでしょう。
- 和宏(モノローグ) キリスト教の信仰か…。バッハが信じていた神って、どんな神なんだろうか。その神を知るには、どうしたらいいんだろう？
- アナウンサー さて、バッハゆかりの聖トーマス教会は、現代も、毎日曜日ごとに、バッハの演奏したオルガンで礼拝音楽を演奏しています…。(FO)
- 和宏(モノローグ) 教会？ 毎日曜日の礼拝？ 教会って、日曜日に何かしてるの？ 一度のぞいてみたいな。でも、うちの近くにキリスト教の教会なんかあるのかな。なんか、入るのが怖いな。全然知らない人ばかりなんだもんな。一体どうすりゃいいんだろう？ 信仰を持って、バッハを演奏してみたいな。ほんとに心から「イエスは我が喜び」って言ってみたいな。だけどなあ…。
- <タイトル>
- ナレーション 西村和彦は、バッハ好きというよりは、バッハ オタクの高校2年生。バッハの音楽を本当に理解するために、教会へ行くべきかかどうか、今、すごく悩んでいます—。
- 郵便配達員 郵便で一す。
- 和宏 はい。(間)(モノローグ)おれあてじゃない。珍しいな。だれからだろう？ 遠山玲子？ ああ、玲子からかあ。今、どうしてるんだろうな。
- ナレーション 遠山玲子は、和宏とは、1年の時、同じクラスでした。和宏は、玲子とは特に親しいわけでもなかったのに、この手紙に少し戸惑っているようです。
- 和宏(モノローグ) なんの用だろう？
- 効果音 (手紙を取り出す音)
- 和宏 (手紙を読む)「西村君、こんにちは。突然のこの手紙に、さぞかし驚いておられることと思います。(玲子の声に)あなたがバッハ好きなことを伝え聞いたので、お便りしたわけです。わたしは、この間、リリングの指揮した「マタイ受難曲」を聴いてきて、今更ながら、バッハの偉大さと、信仰のあかしのすばらしさに魅せられました。ドイツでは、この受難曲を聴いて、神様を信じる決心をする人が、今でもたくさんいるそうです。実はわたしも、バッハの信じていた神様を信じています。そして、毎週日曜日の礼拝でも、聖歌隊の一員として、神様に向かって声を合わせて賛美しています。和宏君も、来週の礼拝に出席してみませんか？ バッハの音楽を真に理解するためには、信仰が必要だと思います。信仰が、心からの賛美を生み出す原動力になるのです。…」
- ナレーション 玲子からの手紙は、便せん5枚にも及ぶもので、自分がクリスチャンになった体験談や、自分の行っている教会についても書かれていました。和宏はこの手紙を読んで、自分の求めていたものを見いだした気がしました。そこで早速—。

効果音 (電話の呼び出し音)

玲子 (フィルター音)もしもし、遠山ですけど。

和宏 あの一、西村という者ですが…

玲子 (フィルター音)ああ、西村君。

和宏 あ、遠山さん？

玲子 (フィルター音)こんばんは。

和宏 手紙、着いたよ。

玲子 (フィルター音)あ、ほんと？ それで、もう読んでくれた？

和宏 うん。それで、今、急いで電話したんだ。この手紙、とってもいい時に来たんだよ。おれ、最近、バッハの声楽曲をよく聴くんだけど、“信仰がないと本当に理解することはできないんじゃないかな”って思った。そして、“バッハが信じていたその神を知るには、教会へ行かなきゃ”って気がしてたんだ。だけどおれ、どこに教会があるのかも知らないし、教会へ行っても、きっと知らない人ばかりだろうし、“どうしようかな”って思ってたんだ。そこへあの手紙が来たっていう訳なんだ。なんか、不思議だね。

玲子 (フィルター音)神様、感謝します！

和宏 え？ なんて言ったの？

玲子 (フィルター音)「神様、感謝します」って言ったの。あのね、その手紙、自分で書き上げたという気がしないの。神様が書かせてくださったのよ。西村君が、そんなことを考えていたなんて思いもよらなかったわ。神様が、西村君を救おうとしておられるのよ。だから、思わず神様に感謝したわけ。

和宏 ふーん。でもなんでこの手紙を書く気になったの？ 一度も僕のところに手紙なんかくれたことなかったでしょう？

玲子 (フィルター音)ええ、それが不思議なのよ。今週の月曜ね、夜中の2時頃に目が覚めちゃったの。それで、まだ早いから、もう一回眠ろうと思ったんだけど、どうしても眠れないのね。それで、これはきっと神様が、わたしに起きることを望んでおられるに違いないと感じて、起きて、イスに座って、お祈りしたの。「神様、この時に、わたしがなすべきことを教えてください」って。そしたら、なぜだか分からないけど、西村君がバッハ好きだということを思い出して、マタイ受難曲を聴きにいった感想みたいなのを書かなきゃいけないような気がしてきたの。それで、西村君への手紙を書いているうちに、自然に言葉が飛び出してきて、神様のことを伝えるあんな手紙になったの。あの手紙は、今でも、自分で書いた気がしないのよ。神様が書かせてくださったんだわ。

和宏 ふーん。そんなことがあったのか。やっぱり、神様っているみたいだなあ。神様がおれを導いているような気がするんだ。

玲子 (フィルター音)そうよ。そうなのよ。和宏君、この次の日曜日に、教会の礼拝に出席してみない？

和宏 ちよっと待てよ。(手帳を見る)えーと、うん、大丈夫だ。

玲子 (フィルター音)礼拝は朝の10時半からよ。10時に、中学校の前の信号のところで待っていてくれれば、一緒に行けるわ。

和宏 おれ、朝早く起きれないんだ。ちよっと心配だなあ。

玲子 (フィルター音)大丈夫よ。手紙に地図が書き添えてあったでしょう？ 待ち合わせ時間に遅

れたら、あの地図を見ていけばいいわ。

和宏 ああ、必ず行くよ。

玲子 (フィルター音)それじゃあ、待ってるわね。きっとよ。

和宏 ああ。それじゃア。

効果音 (受話器を置く音)

ナレーション 二人とも、信じられないようなことが起こったのを感じました。それから玲子は、次の日の祈り会で、皆に和宏君のことを祈ってもらいました。

A 神様、西村君の健康が支えられ、来週の礼拝に出席できますように。

B 西村君が、日曜の朝早く目覚めますように。

C 西村君が、神様の救いを受け入れることができますように。

ナレーション 次の日曜日——。

玲子 神様、あなたが西村君を導いておられることを感謝します。西村君を早く送ってください。

ナレーション ところが和宏は、10時に待ち合わせ場所に来ませんでした。

玲子(モノローグ) 西村君、どうして来なかったのかしら？ 直前になって、行く勇気がなくなったのかしら？
みんなにも祈ってもらったのに。(間)神様が導いてくださったんだ。きっと来るわ。

ナレーション 玲子が教会に着いた時には、すでに10時20分になっていました。

玲子(モノローグ) やっぱり来ないのかなあ。約束してあったのに…。

和宏 (オフ)あもう、遠山さんの友人なんですけど…。

玲子 あ、来た！ 神様、ありがとうございます。

玲子 (教会の玄関に走っていき)おはよう！

和宏 おはよう。CD聴いてたら、いつの間にか時間が過ぎちゃってさ。

玲子 さあ、中へどうぞ。なるべく前のほうにね。

司会者 皆様、お立ちいただきまして、頌栄の539番を賛美いたしましょう。

効果音 (一同が立ち上がる音。)

賛美 (賛美歌)

ナレーション こうして、和宏の出席した初めての礼拝が始まりました。

司会者 それでは、聖歌隊に賛美をお願いします。

音楽 (賛美歌)

和宏(モノローグ) すばらしい合唱だなあ。みんな、なんか顔が輝いてる。目には見えないけど、やっぱり神様
っているんじゃないかな。もしほんとにそうだったら…。神様、あなたを信じることができるよ
う、助けてください。

ナレーション いつしか、和宏の口からは、自然に祈りの言葉が漏れていました。それは、神様を求める
初めての祈りでした。そうです、この時から、彼の新しい一歩が始まったのです——。

<完>